



219号

2016 / 12 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



晩秋の丹巴^{タンバ}巴底^{パティ}郷 四川省丹巴は冬の気温は東京と同じ位で、12月初旬でも黄葉が残ります。写真は巴底^{パティ}周辺の領主の館跡に残る9層の塔です。13世紀に元朝の軍隊が進攻して来た時の領主が、前後ともに崖になっている要衝の地に築いた館で、今も家来の子孫の一部が館跡の周囲に住んでいます。(2009年12月撮影)

大川健三(四姑娘山自然保護区管理局 特別顧問)

‘わんりい’ 2016年12月号の目次は最終ページにあります

‘わんりい’の中に、中国語勉強会があります。その先生が、最近中国へお帰りになり、ご家族で雲南省への旅行を楽しまれたそうです。聞きとり練習のために、先生は中国語で話してくださったのですが、興味深いお話に、日本語の質問が俄然多くなりました。

先生が訪れたのは、雲南省の北部の美しい湖、瀘沽湖の畔の摩梭人の部落でした。この摩梭人は、4万人ほどで、中国の少数民族56族には数えられておらず、現在はナシ族に組み入れられ、摩梭人と呼ばれているのですが、彼らの特徴は、中国で唯一残っている母系社会を形成していることです。

母系社会ですから、当然女尊男卑で、女性は13歳になると、部屋を一つ与えられます。男性は、かがり火をたいた野外の舞踏会などで見染めて約束をした女性の部屋を夜半に訪れ結ばれるのです。大部分の男性は、自分専用の部屋を持たず一生を過ごすそうです。

女性が妊娠して、女の子を産めば、周りの女性の世話を受けて1か月はゆっくり休むことが出来ます。今でも中国では、産後1か月はベッドを離れてはいけなと言われ、特別に「月嫂(産後専門のお手伝いさん)」を頼んで、身の回りや新生児の世話をしてもらいます。最近では、仕事の関係で、そうそう休んでいることが出来ない女性も多いのですが、それでも、生まれた子供の性別に関係なく、産後はかなり大事をとっています。しかし、この摩梭人社会では、生まれた子供が男の子だと、出産した女性は、3日休んだだけで、他家の手伝いに出されるのだそうです。女尊男卑もここまでくると痛快ですね。

結婚の形式だけ見ると、この男性が女性のところに通うのは、「妻問婚」として、日本でも古い時代にはあったようですから、随分古いしきたりの中で生活しているのだなあとの印象を持ちますが、結婚以外の生活では、摩梭人の社会にも近代的な文明の利器が進出しているようです。

お土産をたくさん買って、大荷物になり以後の観光に不便だとなれば、託送業者に頼んで、家に届ける

ことが出来ます。帰宅後に、買って来たお土産が気に入り、追加をしたいと思えば、携帯やパソコンで土産品の販売元に注文をすると、都会と余り変わらない時間で届けられるのだそうです。こんな山奥にも通信網が出来上がっているとは驚きです。

携帯電話の普及に関して、私は北京で普及の様子を目の当たりにしてびっくりした経験があります。携帯電話は、1990年代から開発され始め、改良されてビジネスマンの間に普及していきましたが、日本では固定電話と公衆電話が整備されているので、一般の人への普及には、随分時間がかかったと思います。私が北京へ出かけた2000年には、日本でも街中で使用する人が、チラホラ見られるようになって来ました。

その頃北京では、一般家庭で電話のある家は非常に珍しい状態で、日本と比べてかなり遅れていました。それが、2003年頃には、バスの中などで、大きな声で電話をしている人を見かけるようになり、携帯電話が普及し始めたなと感じたら、見る見るうちに、隣のおばさんまでも携帯電話を持つようになりました。正確な統計資料を把握しているわけではありませんが、2004年頃には、北京市内での普及率は、当時の日本よりも高くなったのではないかと感じました。結局、中国では、各家庭の固定電話は普及せずに、携帯電話がその代わりをするようになりました。

日本だと、ちょっとした山の中などは「通信圏外」の表示が出て、通話できないことがありますが、今回伺ったお話で中国では、雲南省の山奥の村でも携帯電話が通じるのだと分かりました。中国は、宇宙開発に熱心で、独自の宇宙ステーションを打ち上げて、宇宙飛行士をステーションに送り込んでいますが、その合間には、通信衛星をいくつも打ち上げて、中国全土をカバーする通信網を構築しているのです。国土が広大な中国では、通信衛星の方が、地上で電話線を張り巡らせるより、安上がりなのでしょう。

Jiǔ wú liàng, bù jí luàn
酒 无 量, 不 及 乱

酒は量なし、乱に及ばず 〈郷党第十〉

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



孔子は『論語』の中で、「道^{みち}を謀^{はか}りて、食^{しょく}を謀^{はか}らず」〈衛霊公第十五〉と言っています。また、「食^あに飽^あくことを求^{もと}むる無^なし」〈学而第一〉とも言っています。いずれも君子のあり方を説いたもので、君子たる者、世の為に働くことが第一で、「食べる」ことは二の次だ、という意味です。

では孔子は食生活には無関心だったのでしょうか。必ずしもそうとは言えません。ここで言う「食」とは食事ではなく、食^{しょく}禄^{ろく}、給料のことです。暮らしの満足度、と言い換えることもできます。人の上に立つほどの者は、自分の暮らしにあまりこだわらな、というのが真意です。では食生活について、孔子はどのように考えていたのでしょうか。

次の文を見てみましょう。「食^じ不^ふ厭^{えん}精^{せい}、脍^{かい}不^ふ厭^{えん}細^{さい} (Sì bú yàn jīng, kuài bú yàn xì) (食^じは精^{せい}を厭^{えん}わず、脍^{かい}は細^{さい}を厭^{えん}わず)〈郷党第十〉。この場合の「食」は現代中国音では sì、日本音では じと読みます。「食」とは米、麦、黍等、主食になる穀物のこと、いわゆるゴハンのことです。精^{せい}は精^{せい}げること。米ならば精米することです。脍^{かい}は細^{さい}く切^きった肉のことです。ここの意味は、穀物はできるだけ丹念に精^{せい}げ、肉はできるだけ丹念に細^{さい}切りにする、ということになります。

これだけ見ても孔子は、食物に無関心どころか、相当こだわっていたことが窺えます。文は続きます。「食^じ饑^き而^に餓^が、魚^{ぎょ}餒^に而^に肉^{にく}敗^{たい}、不^ふ食^じ。色^{しき}悪^{あく}不^ふ食^じ、臭^{くさ}悪^{あく}不^ふ食^じ (Sì yì ér ài, yú něi ér ròu bài, bù shí。 Sè è bù shí, chòu è bù shí) (食^じの饑^きして餓^がし、魚^{ぎょ}の餒^にして肉^{にく}の敗^{たい}したるは、食^じらわず。色^{しき}の悪^{あく}しきは食^じらわず。臭^{くさ}いの悪^{あく}しきは食^じらわず)。ゴハンの古^{ふる}くな^なったもの、魚^{ぎょ}や肉^{にく}の爛^たれたもの、色^{しき}の良^よくないもの、臭^{くさ}いの良^よくな

いものは食^じべない。饑^きはゴハンが古^{ふる}くなること、餓^がは味^{あじ}が変^かわること、餒^には魚^{ぎょ}が腐^くること、敗^{たい}は肉^{にく}が爛^たれること。これらの文字はいずれも賞味期限がとくに切れていることを表わします。今日の常識からすると当然のことかも知れませんが、保存法や衛生知識の不十分だった当時の状況を考えると、孔子は食生活に人一倍神経を使っていたと言えます。

文は更に続きます。「失^し飪^{じん}不^ふ食^じ、不^ふ時^{とき}不^ふ食^じ、割^か不^ふ正^{せい}、不^ふ食^じ。不^ふ得^{とく}其^き醬^{じょう}、不^ふ食^じ。肉^{にく}虽^い多^た、不^ふ使^し胜^{しょう}食^じ气^き (Shī rèn bù shí, bù shí bù shí, Gē bú zhèng, bù shí。 Bù dé qí jiàng, bù shí。 Ròu suī duō, bù shǐ shèng sì qì) (飪^{じん}を失^しいたるは食^じらわず。時^{とき}ならざるは食^じらわず。割^かの正^{せい}しからざるは、食^じらわず。其^きの醬^{じょう}を得^えざるは、食^じらわず。肉^{にく}は多^たしと雖^いも、食^じ氣^きに勝^{しょう}たしめず)。煮^に具^ぐ合^がの悪^{あく}いものは食^じべない。時^{とき}節^{せつ}に合^あわな^ないものは食^じべない。調理^{ちり}法^{ぽう}の正^{せい}しくな^ないものは食^じべない。タレの合^あわな^ないものは食^じべない。肉^{にく}は多^たくてもゴハン以上には食^じべない。

飪^{じん}とは煮^に具^ぐ合^がのこと、時^{とき}とは旬^{じゆん}のこと、割^かとは調理^{ちり}法^{ぽう}のこと、醬^{じょう}とはタレのこと、食^じ氣^きとはゴハンの量^{りやう}のことです。孔子の食^じへのこ^こだわ^わりも、こ^こま^までくると食^じ通^{つう}の域^{いき}に達^たして^いたと言^いえるか^かもし^しれ^れま^ません。し^しか^かも食^じ事^じ心^{しん}得^{とく}として^{して}は現^{げん}代^{だい}でも十^{じゅう}分^{ぶん}通^{つう}用^{よう}し^しそ^そう^うです。では、酒^{しゅ}はど^どう^うだ^だった^たで^でし^しょう^うか。「唯^た酒^{しゅ}无^{りゅう}量^{りやう}、不^ふ及^た乱^{らん} (Wéi jiǔ wú liàng bù jí luàn)」。 (唯^た酒^{しゅ}は量^{りやう}無^{りやう}し。乱^{らん}に及^たば^ばず)。酒^{しゅ}はい^いく^くら^らでも飲^{いん}む^むが、乱^{らん}れ^れる^るほ^ほど^どには飲^{いん}ま^まない。

さすが孔子先生、酒^{しゅ}飲^{いん}みの心^{しん}得^{とく}を示^しすこ^ことも、忘^われ^れて^ては^はい^いま^ませ^せん^んで^でした。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

「江村」

報告：花岡風子

前回学んだ『蜀相』の2か月ほど後に書かれた詩とされています。杜甫は妻と幼子を持って、数千キロにも及ぶ苦難の旅^注の末、成都に辿り着きました。そこで初めて古くからの知人達に助けられ後に草堂と呼ばれる茅葺きの家に落ち着くことができました。浣花溪という溪流と錦江という川のほとりに住まいを得て、杜甫の一家が食うや食わずの生活から抜け出し、ようやく人心地ついた頃の詩です。

前半は曲がりくねった清流に抱かれるような静かな村の風景を描いています。時は夏を迎え、燕が飛び交い家々の梁に巣を作っている。川カモメが仲良く戯れているのどかな農村風景です。

後半は、妻が家で紙に将棋盤を描き、幼子は針を釣り針にしようと叩いている姿を描いています。

また、友人達が代わる代わる来ては、米を分け助けてくれる境遇を語り、最後には「このちっぽけな自分にはこれ以上何を求めるものがあるか」と結んでいます。

杜甫といえば、天下国家の礎になりたいという大きな野望を抱き、精力的に詩を書き活動してきました。しかし、仕えたいと一途に願っていた唐の玄宗皇帝が安祿山の乱で失脚し、息子の肅宗皇帝に仕えて左拾遺の職を得たものの、ソリが合わず、左遷されます。そこで飢饉に見舞われ、その後官を捨てて、甘肅省天水に移動。危険な山道を越えて命からがら蜀(今の四川省)の成都に辿り着きます。ドングリや山芋を食べながら命をつなぐ過酷な旅の末、ようやく雨露をしのげる家と飢える気遣いのない落ち着いた家庭生活を得たのです。

最後の一句を杜甫の仕官への諦めと悔しさの表れとする解釈もあるらしいです。しかし、筆舌に尽くしがたい苦勞を味わったからこそ、平和な自然の風景と家族の安堵の日々を深く身を感じ取ることができたのではないのでしょうか。そしてその安らかな日々を惜しむ詩人の優しげな眼差しが、否応なく目に浮かびます。この作品を機に杜甫の作風も変化を見せ、政治家ではなく「詩人」としての生き方を定めたよう

jiāng	cūn					
江	村					
		作者：杜甫				
qīng	jiāng	yī	qū	bào	cūn	liú
清	江	一	曲	抱	村	流
cháng	xià	jiāng	cūn	shì	shì	yōu
长	夏	江	村	事	事	幽
zì	qù	zì	lái	liáng	shàng	yàn
自	去	自	来	梁	上	燕
xiāng	qīn	xiāng	jìn	shuǐ	zhōng	ōu
相	亲	相	近	水	中	鸥
lǎo	qī	huà	zhǐ	wéi	qí	jú
老	妻	画	纸	为	棋	局
zhī	zǐ	qiāo	zhēn	zuò	diào	gōu
稚	子	敲	针	作	钓	钩
dàn	yǒu	gù	rén	gòng	lù	mǐ
但	有	故	人	供	禄	米
wēi	qū	cǐ	wài	gèng	hé	qiú
微	躯	此	外	更	何	求

にも取れます。

この後、杜甫は嚴武という先祖の代からの知り合いに工部員外郎という名目だけの役職を世話されますが、その時杜甫はもう役職につくのは嫌だと断ったそうです。ところが嚴武は半ば無理矢理杜甫をこの職に就けてしまいます。しかし、晩年少数民族が成都に乱入したことで、杜甫は再び安住の居を追われ、長旅の末、長沙で亡くなりました。

盛唐末期の戦乱の世にあって、一度も武力と関わることなく筆一本で生き抜いた杜甫。国を愛し、家族を愛した人生に地味ながら、濁りなき清々しさを感じます。

この詩は中国で今なお愛読される『唐詩三百首』にも入っておらず、さほど有名な詩ではありません。植田先生も今日の講座の前に「はて、なぜ自分はこの詩を選んだかな?」と思うほど、一見何でもないような詩だったそうです。「ところが、繰り返し読めば読むほどジンワリくるんだよね」「李白の詩は読んだ瞬間ノックアウトパンチのような強烈なインパクトがある。杜甫の詩は読んだ瞬間は平凡で、それがどうした? って感じだけど、後からジワー、ジワーッとくる。李白がパンチなら、杜甫はボディーブローか

なあ〜」とのコメントに一同深く頷きました。

この後、この詩の構成についても詳しくお話がありました。この詩は律詩です。律詩、絶句は偶数句の最後の一字に韻を踏む決まりです。七言律詩(絶句)の場合は最初の一句も押韻します。この詩は流、幽、鷗、鈎、求の5箇所を平声(第1、2声)で押韻しています。

この場合、韻を踏んでいない奇数句の末尾は仄声(第3声、4声)にする決まりですが、これも「燕」、「局」、「米」とキチンと仄声で決めています。「局」は現代中国語では2声の平声ですが、古代音では仄声になります。また、律詩や絶句など限られた字数の詩では繰り返し同じ字を用いることを避けるのが一般的ですが、杜甫はこの詩で重ね字を多用しています。

一句目で「江」と「村」、二句目で「江村」と「事事」、三句目で「相親相近」と、重ね字を多用し、民謡のような独特のリズム感を出しています。植田先生曰く「重ね字は律詩や絶句では言わば禁じ手。多用しすぎると俗っぽくなる。リズムの良さと俗っぽさのすれすれ」「前半四句で散々重ね字を使っておいて、後半は、重ね字をやめ、グッと締めている、この対比も面白い」と。

杜甫の凄さは、詩の基本法則をキチンと守りながらも独特のリズム感を出しているところ。あたかも自由に書いているように見せながら、基本は外しません。また、全56文字という限られた字数の中で、自然の風景の静けさと心中の穏やかさ、「燕」と「鷗」の伸びやかな暮らしぶり、「人」の睦まじい家族生活、家族の愛情と友の友情、という風に連想が重ねられていいきます。

巢に餌を運ぶ燕からは子育ての姿を、川面を仲良く泳ぐカモメの姿は夫婦愛を彷彿させます。読めば読むほど、計算し尽くされたような詩の構成と一幅の絵のような魅力を感じました。

「古典の良いところは、自分の変化について来てくれることだね〜。2、30代に読んだときは『何だこりゃ』としか思えなかった詩が50代に読むと『なかなかイイね〜』と思え、70代になると『すっごくいいなあ』と変わっていく」植田先生の言葉に頷きながら、参加メンバーそれぞれが人生を振り返り、杜甫の人生の転機とも言えるこの詩に想いを馳せました。

詩の背景を伺った後は、いつも通り中国語での音読練習。先生について句ごとにに分けて読むことから始め、参加者全員の詩の朗唱の声が重なります。中国語の言語で音読するからこそ押韻やリズム感の魅力を味わうことが出来る、今回もそんな贅沢な時間を堪能しました。

最後の雑談タイムに講座参加の田井さんから、杜甫のこの詩はイギリスの詩人、ロバート・ブラウニング(1812 ~ 1889)の『春の朝(1841年作)』を彷彿させる、との感想がありました。とても有名な詩だそうです。なんでもない朝が特別に見える。世界広し、と言えども人の幸せの本質はここにあるのかもしれない…。

Pippa's Song Robert Browning

THE year 's at the spring,
And day 's at the morn;
Morning 's at seven;
The hill-side 's dew-pearl'd;
The lark 's on the wing;
The snail 's on the thorn;
God 's in His heaven--
All 's right with the world!

春の朝 上田敏 訳

時は春、
日は朝、
朝は七時、
片岡に露みちて、
揚雲雀なのりいで、
蝸牛枝に這ひ、
神、そらに知ろしめす。
すべて世は事も無し。
揚雲雀なのりいで、
蝸牛枝に這ひ、
神、そらに知ろしめす。
すべて世は事も無し。

注)：玄宗皇帝の死後、長安で玄宗皇帝の息子・肅宗に仕えたが、ソリが合わず華州(陝西省)に左遷された。その後、官を捨て家族を連れて流浪の人となった。その旅はドングリや山芋などで飢えをしのぐ過酷な旅であったと言われている。

(ウィキペディア抜粋)

▶ 時代の流れに抗して闘うテル

時代は、マルクス主義者や社会主義者を自称していた著名な知識人たちが、時流に乗るかのように変節して、中国に敵対していく状況でした。長谷川テルの手紙はこう続きます。

「人間というものは、こんなにもやすやすと良心の最後のかけらさえも、投げ捨てることができるものなのではないでしょうか。しかし、皆さん、私はあなた方を信じております。ただの一步といえども、あなたがたが彼らに近づかないであろうことを私は確信しております。なぜなら、進歩的なエスペランティスト、真実の国際主義者であるあなただけが、この戦争の意義と、それぞれがとるべき行動の正しい方向とを最後まで理解することができるのですから。

中日両民族のあいだには、根本的な敵対感情などはなにひとつありません。歴史をひもといてごらんください。その反対に、私たちはいずれの民族の側にも親密な関係を見いだすでしょう。1911年、中国の辛亥革命の当時、たくさんの日本人がお隣の民族の解放のために、自ら進んで血を流しました。また数年前には、両民族の労働者たちがプロレタリアートの解放のために、どんなにしっかりと手を握りあったことでしょうか。(中略)

この戦争に中国が勝利することは、たんに中国民族の解放を意味するだけでなく、日本を含むすべての極東の被抑圧民族の解放を意味するのです。それは、全アジア、そして全人類の明日への鍵です」

▶ 人民を裏切らなかったテル

テルの中には日本人民と日本の帝国主義者たちとの区別がしっかりとありました。

実は先の公開書簡より1か月前に、テルは上海で〈愛と憎しみ〉という文章を書いています。

「砲火と砲煙がこの国際都市をおおい、恐慌と恐怖の叫び声があがっている。

おそろしいまでに静まりかえった真昼の空気をふるわせて、砲声が轟いている。いま、あそこでは何百人という人びとが殺されたにちがいない。ある者は声もなく最後の息をひきとり、他の人びとの血塗られた肉体は、泥にまみれて苦しみもだえながら、のたうっているだろう。(中略) フランス租界のうち寒い街角という街角を、難民たちが蟻のようにくろぐと埋めつくしている。どの通りを通ろうと、しわだらけの手や子どもの手が、道ゆく人にむかってさしのべられる。

——誰がこんな目にあわせるのか？ 日本人たちだろうか？

——いや、そうじゃない！ ——私はいそいで頭を横にふり、全身の憎しみをこめて答える。——日本の帝国主義者どもなのだ！」

テルの姿勢は、大勢に流れる“進歩的な知識人”とは画然と、はっきりと違っていたのです。これは本当に特筆すべきことだと思います。

またこうも書いています。

「いま私は、できることなら中国軍に従軍したいとさえ思っている。中国軍が日本人民と戦っているからでなく、日本の帝国主義者どもと戦っているからであり、中国軍の勝利がアジアの明るい未来に寄与するからだ。

それと同時に、私は仲間といっしょになって、声をかぎりに日本の兄弟たちに呼びかける。——いたずらに血を流すのは、おやめなさい。あなた方の敵は、海の向こうの中国にいるのではないのです、と」

▶ 上海を脱出し南方へ向かうテル夫妻

上海の租界にも日本軍は攻め入り、安全地帯ではありません。テルは夫の劉仁とともに、抗日戦争の

第九回 エスペランティスト長谷川テルの人生②
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』
大類 善啓(おおるいよしひろ)

新しい中心地である漢口に向かうべく、上海を脱出します。途中、香港や広州に滞在するなど1年ほどの旅の末に、武漢で郭沫若やエスペランティストの胡愈之らの計らいで国民党中央宣伝部国際宣伝処の対日科に迎えられ、マイクの前で日本軍の将兵たちに日本語でこう訴えました。

「日本の将兵の皆さん！ 皆さんは、この戦争は聖戦だと教え込まれ、そう信じているかもしれませんが、果たしてそうでしょうか。違います。この戦争は、大資本家と軍部の野合世帯である軍事ファシストが、自分たちの利益のために起こした侵略戦争なのです。日本にいるあなた方の家族は、おなかをすかせて、ひどく苦しんでいます」

正確なテルの日本語の声は、日本の将兵たちに動揺を与えたようです。テルの正体がしばらくして日本の「都新聞」が明らかにしました。都新聞はこう書きました。

〈今夏、わが無敵皇軍が漢口攻略の火蓋を一斉に切るや、今度はこの怪放送が漢口を舞台として毎夕行われ、日本軍の誹謗、日本経済に関するデマを紅い唇に載せて毒づき始めた。かくて、去る二十七日午後五時三十分！ 神速皇軍の威力が完全に武漢を圧したその刹那から、この怪放送はハタと止まってしまったが、間もなく覆面の女性長谷川照子の全貌が明るみに曝されるに至った〉

その記事の見出しにはこうありました。

〈「嬌声売国奴」の正体はこれ 流暢・日本語を操り 怪放送 祖国へ毒づく “赤”くづれ長谷川照子〉

東京のテルの実家には新聞記者が押しかけました。テルの父親・幸之助は、「私としては、私の子である照子が断じて祖国に弓を引くような女でないと信じますが、もしそうだったら私は日本臣民の名誉にかけて立派に自決する覚悟をしております」と語りました。その後、当時58歳の父親のところには「自決せよ」という手紙が少なからず投げこまれました。

この時代、中国は日本の帝国主義者たちとの闘いに対しては激しい内部争いが生じていた時代でした。

まず、1936年西安事件(事変)が起こります。この12月、国民党の若き闘士、張学良が西安で蒋介石を監禁し、内戦停止を要求しました。この時、周恩来が登場して調停を行った結果、蒋介石から内戦停止と、一致して日本に対して闘う約束を取り付けました。いわゆる第二次国共合作が成立したのです。

この激動の時代、テルは武漢に3か月ほどいて、国民党中央宣伝部対日科ともに武漢を離れ、重慶に向かいます。一方、周恩来、郭沫若、胡愈之の3人は1938年1月、国民党統治地区の武漢市内で「新華日報」を発行した後、同年10月武漢を去り、重慶に移りました。ちなみに、広島に原爆が投下された時、この新華日報は「原爆投下は人類への犯罪であり、許されない。原子力は平和利用に活用すべきだ」という社説を書きました。一部に、日本に対して「ざまあみろ」というような声があったにも関わらず、国際主義的精神を発揮したのです。

国民党、共産党と一線を画すもう一つの政治勢力に汪兆銘(号は精衛)のグループがありました。

汪兆銘は国民党の重鎮でしたが、蒋介石の個人独裁を批判し、また理論家として一切の官職に就かなかった清廉さが人望を集めました。日本との和平を求め1938年、陳公博、周仏海らとともに重慶を脱出しハノイに向かい、対日和平声明を発表しました。

このような複雑な中国国内の動きをテルはどこまで理解していたのでしょうか。結果的にテルは、1938年の冬から1945年の冬まで重慶で暮らし、最終的にテル夫妻は国民党中央宣伝部対日科を離れて、郭沫若の対敵文化工作委員会に移っていきます。そして周恩来が指導していた「新華日報」や延安から発行されていた「解放日報」などにもテルの文章が発表されていたようです。テル夫妻は国民党から離れて中国共産党に共感していったのでしょうか。(続く)

■(この項については高杉一郎著『中国の緑の星—長谷川テル反戦の生涯』に多く負っています)

東西文明の比較 (10)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

大陸と日本の交流について、興味ある説があります。交流には、東アジアの自然(植生)が関係していたということです。大陸をも俯瞰した考えです。

「中国は、長江と淮河の間域を境として南北に2つの森林地帯を分けします。南側は常緑のカシ類を中心にシイ類・タブやツバキなどの「常緑広葉樹林帯」。ヒマラヤの中腹からアッサム・雲南の高地、長江以南の江南山地を経て朝鮮半島南部や日本列島西部(中部地方を境)に及ぶ地域です。これに対し

て北側の森林地帯を「落葉広葉樹林帯」と定義します。コナラの樹木が中心です。中国東北部からシベリア・樺太、日本列島東部、朝鮮半島北部までを指します。これらの2つの地域内で文化交流が行われていた」という説です。(以上前号のママ)

東アジアの自然と二つの文化類型

中国大陸の森林帯は、長江・淮河を境に南北に分けられます。南側の常緑広葉樹林帯は「照葉樹林帯」とも呼びます。これに対して、北部の森林帯の落葉広葉樹林帯は、「ナラ林帯」ともいいます。これら、「照葉樹林帯」と「ナラ林帯」をそれぞれ特色づけるような伝統的な文化要素が多数存在し、その地域の自然に根ざした特有の文化のまとまりが形成されています。

プレ農耕段階のナラ林文化

中国東北部から朝鮮半島北部に及ぶ一帯とそれに隣接する沿海州やアムール川流域

一帯は、冷涼な気候に適応した、よく似た文化的特色を見ることが出来ます。この地域は紀元前2000年から前1000年初頭のウリル文化、中国東北部では鶯歌嶺^{おうがけい}上層文化にあたります。アワやキビを栽培し、ブタを飼育する農耕の段階に入ったとされています。その農耕は、河北の黄土地帯から伝来したものではなく、北緯50度を中心にアジア大陸を東西に横切る森林・ステップ地帯を経て、中央アジアあたりから北回りのルートで、東アジアに達したと考えられます。その延長線上に、我が国の在来農耕の痕跡が見られます。日本列島へ北から文化的影響が具体的に示す事実として興味があります。

この時代以前のこの地域は、新開流遺跡(黒竜江省)が代表されます。そこからは平底の深鉢型土器や多数の石刃鎌、^{もり}銛の骨角器が出土しています。狩猟や漁労に生活基盤をおきながら、定住していたようです。このころの日本は、縄文時代早期末(7000年前)から前期です。北海道東部の縄文時代早期の遺跡からは、新開流遺跡から出土した石刃鎌や平底の深鉢と同類のものが出土し



図 照葉樹林文化圏とナラ林帯文化圏(佐々木高明著、「日本史誕生」集英社1991年。挿入図を改変)

ています。

北東アジアの石刃鏃石器群にともなって出土する土器には「尖底」のものと「平底」のものがあります。尖底土器グループはバイカル湖周辺からザバイカル地方の落葉針葉樹林帯に分布するのに対して、平底土器のグループは北海道東部、サハリン、沿アムール、中国東北部などの常緑針葉樹林帯（照葉樹林帯）に分布しています。平底の深鉢型土器は、落葉針葉樹林帯（ナラ林帯）には産しない堅果類を「加熱処理法」であく抜き調理する道具ではないかと思われます。いずれにしても、中国東北部を中心に、沿海州や沿アムール地方、サハリンに至るナラ林帯には、縄文時代に相当する時期に、縄文文化とよく似た特色を持つ食料採集民の文化が広がっていたことがわかります。

照葉樹林文化とは

ナラ林文化に勝るとも劣らず、日本の基層文化の形成に大きな影響を与えたのが、照葉樹林文化です。ヒマラヤの中腹から日本に至る照葉樹林帯に、共通の文化的要素があることは、あまり知られていないのではないのでしょうか。ネパール、ブータンから北タイや中国雲南省、貴州省の文化を調査した結果、照葉樹林文化の核心地帯は、雲南を中心にした地域に有り、その文化の発展段階は「プレ農耕段階」と「雑穀栽培を主とした焼畑農耕段階」の二つに分けられること。焼畑段階の照葉樹林文化は、後に水田稲作文化を生み出す母胎になったことが明らかになりました。

この文化の発展段階における主な特色は、茶・漆・絹・麴酒・納豆・餅・スシなどの他に、歌垣・八十五夜・鶉飼いなど、わが国の古い民族慣行の中に深く刻み込まれた文化的要素が、この東アジアの照葉樹林帯にルーツを持つことが明らかになりました。ここで興味が湧く点は、「縄文文化に照葉樹林文化の要素が、どのようにして採り入れられ、日本文化の基層形成に寄与したか、とい

うことです。

鳥浜貝塚での発見

福井県三方湖畔にある鳥浜貝塚遺跡からヒョウタンやリョクトウなどの栽培植物の種子が検出されました。縄文時代前期の地層から、エゴマやシソのほか、ゴボウやアブラナ類の種子が発見されています。ヒョウタンはアフリカ、リョクトウはインド、エゴマやシソは東アジアの照葉樹林帯、ゴボウは南シベリアに、それぞれ起源を持つ栽培植物であり、日本で自生したものではありません。したがって、鳥浜貝塚での発見されたこれらの作物は、いずれもアジア大陸の照葉樹林帯を経て日本列島に、人の手によって運ばれたといえます。

縄文時代前期を境に、この鳥浜からは、さまざまな新しい文化的要素が発見されています。漆を使用した木器類や骨角器、磨製石斧、石皿、編み物などの優れたものです。このような新しい文化の発展を促したものは「プレ農耕段階」の照葉樹林文化の伝来だったと考えられるのではないのでしょうか。ここで誤解の無いようにしなければなりません。

鳥浜貝塚での発見の数々を述べてきましたが、ここでの主たる食料は、クルミ・クリ・ドングリなどの堅果類を中心に、ユリ根などの野生のイモ類、シカやイノシシの肉、淡水魚などを加えたもので、大部分は、狩猟・採集・漁労に依存する生活に変わりはありません。

縄文文化はトータルで考えると、東日本のナラ林帯を中心に、豊かな食料採集民の文化として、その特色を維持してきたとみて間違いありません。ところが、縄文時代前期以降、西日本の照葉樹林帯には、プレ農耕段階の照葉樹林文化が大陸から伝来し、定着したようです。

こうした段階で、縄文文化の東西の「差」は、いっそう明確になったといえるのではないのでしょうか。

(続く)

前号に引き続き「金州」について紹介したい。

金州城については、約100年前に発行された書物(明治・大正の旅行シリーズ17)に次のように書かれている。

〈明の洪武年間(約530年前)古城を修め衛城と為してより爾後久しく倭寇防備の首城たりしが、今の城郭は清朝乾隆39年^{注1)}(約144年前)の重修に係り、周圍三十余町^{注2)}四方各一門を通ず。過る二大戦役に際し、此の城亦我軍攻撃目標の一たりしかば、当時の惨劇を偲ぶべきもの尠からず〉

さらに人口は当時約9千人であった。また文中、〈当時の大砲などを撃ち合った惨劇の跡は少なからず〉あったと書かれているが、今ではその跡はほとんど見当たらず、前号に書いた「金州博物館」に行かなければ往時は偲べない。この城が倭寇防備の城でもあったとは思ひもよらなかった。考えてみれば、朝鮮半島沿岸から渤海湾まで倭寇が荒らしまわったのであるからさもありなんとと思う。

北門跡の石碑は見る事ができなかつたので、次に北門跡から近い「金州副都統衙署」旧址に行った。〈衙〉という字は昔の役所のことである。この役所は前号ですこし触れたように清朝時代に海防のために1843年に設置された。この時代はアヘン戦争(1840年～42年)の直後であり、海防は喫緊の政策であった。5,940平方メートル(約1800坪)の敷地に17棟の建物があるが、ほぼ完全な状態で保存されており貴重な遺産である。実は、敷地内に正岡子規の「行く春の酒をたまわる陣屋哉」句碑があるという話を聞いていたので

それを探してみたが、見当たらなかった。これも後日、金州博物館に保管中ということが分かった。またもや石碑は空振りに終わってしまった。

さて、いつごろ子規(1867～1902)がここを訪れたのかを紐解いてみよう。正岡子規は、東京大学中退後叔父の紹介で1892年(明治25年)に新聞「日本」の記者になった。1894年に日清戦争が勃発すると、幼馴染の秋山真之の海軍での活躍ぶり(子規没後の日露戦争では重責を担う)に刺激されたようで、従軍記者に志願して1895年4月に遼東半島に向かい金州に到着した。当時は大連は

まだ農村である。しかし現地に着く直前の3月30日に下関で李鴻章が休戦条約に調印したことが到着して分かった。おそらくかなり落胆したであろうことは容易に想像できる。5月半ばには帰国したのであるが、5月2日に彼を大変喜ばす出来事があった。旧松山藩主の久松定謨(ひさまつさだこと)がいて、宴を催し子規を招いて慰労したのである。感激した子規は、「日本」に掲載した「陣中日記」にこの俳句を書いている。それを石に彫った句



正岡子規石碑 2002年撮影
(「ざったび」<http://zattabi.net>より転載)

碑が衙署に設置されていたのであるが、写真で見れば立派なものである。句碑に関しては、第二次世界大戦後、地元の中国人が中国共産党や文化大革命の嵐から守るため土中に埋めて隠しておいたという話がある。事実とすれば、地元の中国人に感謝したい。子規の詠んだ句としては平凡なものに属するかもしれないが、背景を知ると感慨も一入である。子規は帰国する船中で咯血し、病も重く松山に帰郷し以後闘病生活を送り、1902年に34歳の若さで逝ってしまった。

「金州副都統衙署」を後にして金州の中心部から北に車で15分くらい走ったところにある「石河烽火台」に向かった。烽火台は昔の戦争時に使う「のろし」を上げる台である。石河という所にある烽火台は明代(1368年～1644年)に造られているが、いつのころまで使われていたのであろう。グラハム・ベルが電話を発明したのが1876年であるから、比較的近代まで通信手段は「のろし」に頼っていたのではないか。石河の町に入り何人かの地元の人に聞いてみても皆知らない、との返事ばかり。2007年に遼寧省の文化財の保護指定となってい



革命家「関向应」像。後ろの建物は旧金州博物館 (Google Panoramioから転載)

るのに関心のある人はいないのか、と友人と途方に暮れた。看板の一つさえ見当たらない。そこに自転車に乗ったおじいさんが来たので聞くと、先程から何度か通っていた墓地の奥にあるという。「〇〇陵园」と書かれた立派な門があったので、ここにはないであろうと勝手に判断したのだ。早速その場所に行くと、遠くに写真で見た石垣が見えた。「石河烽火台」と案内板くらいなぜ作らないのかと文句を言いたくなる。ところがそこからが大変であった。100mほど坂道を登ったところから道がないのである。身の丈ほどの雑草が生い茂り、隙間から石垣が見えるが行けそうにもないので写真だけ撮ってあきらめることにした。烽火台は、周囲34メートルの長方形で高さは4～5メートル程度と資料にはあった。次回来る機会があればよく切れる植木ばさみを持参しよう。

今回の金州訪問の報告は以上であるが、歴史の町、金州はほかにも見るべきところがある。一つだけ紹介すると、街の中心に馬に跨った人物の像がある。高さ2メートル位の石の台座の上にあるのでとても目立つのだ。この人物は「関向应」(1902年～1946年)という。金州出身の革命家、

政治家、軍事家である。一生を党と軍の重要指導職務を担当し、人民の解放事業に歴史的な貢献があったという。しかし長年苦勞したため早死にした。こ

のとき毛沢東から言葉をもらったのであるが、台座に毛沢東の揮毫が次のように刻まれている。

〈忠心耿耿、為党為国、向应同志不死〉

本稿の終わりに「金州」という街の歴史をかいつまんで辿ってみたい。古くは戦国時代から秦の時代(BC475年～BC206年)にかけて遼東郡の管轄下に置かれた。その後、高句麗、遼(契丹族)、金(女真族)と次々に支配者が変わっていった。金州の

名前が初めて登場するのは、「金」が支配していた1143年である。その当時の「化成県」を金州と改めた。その後も「金州街」や「金州庁」など幾度も名称が変わっている。そして日清・日露戦争を経て、日本とロシアに交互に支配された。第二次世界大戦後、1949年に中華人民共和国の領土になり今日に至っている。まことにめまぐるしい変遷であり、この地方に住む住民は2千年以上も歴史に翻弄されてきたと言えよう。

次になぜ「金」という国名になったのかをネットで見ると次のように書かれている。「金」はもともとは黒竜江省の大河「松花江」の支流の「按出虎水」



金州副都統衙署の正門。筆者撮影

の流域に住んでいたそうだが、この地から産出する砂金からこの名称を付けたとされているらしい。そこでなぜ「金州」という地名を付けたのであろうか。ネットに書かれていないので大連に住んでいる中国人の大学教授に調べてもらった。数日後次のようなメールが送られてきた。人文学科史話叢書という書物にある唐の時代の伝説ですが、との前置きの後、〈唐の太宗が東征をした時、大黒山に登り周りの海を見渡して、この海は畑になればいいなあと思ひ金の矢を北側の海に射たところ、海水が引き本当に畑になったというのです。・・・「剣

射金州」という伝説です〉と書かれていた。この伝説を見て、鎌倉時代新田義貞が稲村ヶ崎において黄金造りの太刀を海に投じたところ、みるみるうちに潮が引き始め海伝いに鎌倉に討ち入った故事を思い出した。次号は8月27日の長春の旅行を書いていきたい。(続く)

■注

- 1) 乾隆39年は西暦1773年
- 2) 一町は約109m。したがって三十町は約3270mである。一辺が約800m²強の城壁に囲まれていたことになる。(前号の城の写真と平面図をご参照ください)

フィリピン滞在記 ⑰ --- 2年間の活動を終えて日本に帰国

ルソン大学日本語教師 為 我 井 輝 忠

2年間にわたって続けてきたフィリピンでの仕事もやっと終わった。「やっと」という言葉には、私にとっては「ついに終わった」という意味合いが強い。しかし、まだ続けたいという気持ちもいささかあったが、一応は締めくくりとして、終了した。

11月8日に日本に戻って来た。久しぶりの日本は冬に向かう最中の時期で、成田の地を踏んだ時にあまりにも寒いのは驚いた。30度近いフィリピンから14～15度の日本に戻ってきて、まず感じたことはこの寒さである。帰国してから1週間は寒くて風邪を引きそうだったので外に出たくなかった。徐々に体を慣らさなければならぬと思ったからである。

さて、前回私の誕生日のことについて書いてみたが、その後のことはまだ何も書いていないので、フィリピンでの最後の出来事について少々書いてみたい。

ルソン大学の授業は10月18日の最終試験ですべて終えたが、最終的に試験の結果と評価を大学当局に出すためにコンピューターに入力した。その作業は私には複雑すぎて難しかったので、アシスタントにすべて

やってもらった。フィリピンでの大学は日本と同じように、すべてコンピューター化が進んでいて、こんなに進んでいるのかと、いささか驚かされた面もあった。

その後20日に大学当局が私の送別会を開いてくれ

た。私が教えた観光学科の学生の出席のもとで、その学科の主任教授や日本語クラスの事務的なことを担当してくれた教授や関係者が出席してくださった。また、私の関係者も何人か招いてくれた。

送別会(Send-Off Ceremony)は次の通りであった。

1. Opening Prayer : Ronith Casuga (2nd Year Tourism Student)

2. Opening Remarks : Dr. Amalia G. Dela Cruz

3. Special Message : Mr. Shinji Okumura

4. Special Message : Mr. Terutada Tamegai

5. Closing Remarks : Dr. Donna Joy A. Mangada

6. Thank's Messages from the Students

と言う具合で、1時間半ほどの式であった。終始、心温まるメッセージをいただき、大いに感激した。特



1年間の学習成果について述べた



大学からの感謝状をいただく

に、最後の3人の学生の謝辞は1年間の感想や授業のことなど、忘れられない思い出をそれぞれ述べてくれた。私はこの式に出るまでは、これで終わるという実感がなく、まだ授業があるかのような思いを抱いていたが、これでやっと終了したと納得した。式後は写真撮影となり、しばし学生や先生方との写真を撮った。

最後に、有志の学生や先生方による浴衣の試着が行われた。これは私の関係するグループが大学に寄贈したもので、今回最後に着ていただいた。

1年間は実に有意義であった。それまでの1年間教えていた学生はあまり積極的にやる気がなく、教えていても熱心な学生は少なかったが、今回の学生たちは積極的にやろうとする気持ちが強く、何でも興味を示してくれた。学生たちは観光学科のホテル・レストランマネジメント専攻だったので、日本語に興味を持ったのかもしれない。日本語クラスの学生たちの半数は今タイで研修を受け、来年3月に戻って来るそうである。日本語を学んだことが少しでも役に立ってくれることを期待したい。

送別会が済むと、あとは急に慌ただしくなった。帰国は11月8日であったが、学生たちが一緒に旅行したいということになり、4年生の学生たちとザンバレスというビーチ・リゾートへ出かけた(これは私の誕生日を兼ねたもので、これについてはすでに前号で記した)。

またアパート内の荷物の整理をしなければならず、以前から少しずつ整理はしていたが、大半はまだの状



着物を着た有志や来賓と共に

態であった。冷蔵庫、ダイニング・テーブル、応接セット、ベッド、クーラー、洗濯機、扇風機などは備え付けの家具であったので、そのまま大丈夫であったが、デスク、2台目のベッドとクーラーは私が持ち込んだものなので持ち出さなければならない。また使用した台所用品はかなりあり、ほとんどはアシスタントに譲った。フィリピンで購入した書籍と雑誌は帰国の際荷物として持ち帰るのはあまりにも多いので、郵便で送ることにした。段ボール2個分もあった。後日郵便局に持って行き、重量を計ってもらうと、18キロと12キロもあり、郵送料を聞くと、航空便(EMS)で大きい方が6000円ほど、小さいほうが4000円もした。かなり高いが、これで送ることにした。本当は船便にしたかったが、取扱いしていないとのことだった。

何だかんだ忙しい日々が続いたが、以前からマニラに住む日本人の知人からセブ島へ行かないかと誘いがあり、この忙しい時期にどうだろうかと考えてたが、おそらく今後行く機会はないものと思い、行くことにした。これについては次号で報告したい。

【'わりい'の原稿を募集しています】

'わりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又'わりい'の活動についてのご希望やご意見及び'わりい'に掲載の記事などについても、簡単な感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル 'わりい'

初めてスリランカに訪れた1990年、設計者の美意識があちこちに感じられるホテルに泊まった。砦跡の高台、レストランからみる絶景、天井一面に施されたバティック(ろうけつ染めの布)の面白さ、何気なく置かれたインテリア等々にこだわりが読みとれた。今思えば、ジェフリー・バワ(1919～2003年)が遺した建築群の一つではなかったのかと思う。当時はバワ芸術が話題に上ることはなかったが、その後アジアリゾートが脚光を浴びるに従って彼の作品が注目されるようになった。彼は独自の着想で建築物を一つ一つ完成して行くたびに、彼独特の才能が華開いていった。彼が手がけた建築物に足を踏み入れた人たちはまるで魔法に掛けられたように、バワのオーラの虜になりうっとりと夢見心地になるに違いない。バワは世界屈指の建築家である。同時にバワによる建築作品は全てスリランカの文化遺産でもある。

🏯「大阪万博・セイロン館」はもしかして、バワの作品? ²⁾

1970年、私は大阪万博を訪れた。30才を過ぎた頃である。会場の話題をさらったのは、岡本太郎画伯の太陽の塔であった。あちらの展示会場は長蛇の列、こちらの入口は人ざかりで混雑を極め、それだけで疲労困憊であった。人の波をぬって歩いたことを思い出す。「セイロン

館」は外観がスチール枠でモダンなガラスで覆われていた。比較的空いており、とりあえず入ってみた。館内に足を入れると、外見とはうって変わり数えきれないランタンが輝いていた。ブロンズの菩提樹も置かれていたと思う。その程度のおぼろげな記憶でしかない。が思えば、ランタンこそスリラ



ジェフリー・バワ設計の大阪万博セイロン館。
(エキサイトブログより)



スリランカのウエサク祭(2015年)。
(ウィキペディアより)

ンカの国をあげての仏教行事の一つである「ウエサク祭」で使用されるものである。

因みに、ウエサク祭は仏陀の生誕、成道、入滅を記念して、5月の満月の日(ポヤデー)に行われる。各家に飾られるランタンには、毎晩明かりが点されるが、この明かりは「法の光」を象徴するとともに、悟りの境地のシンボルでもある。

明かりの点灯は光による供養であり、功德のシンボルでもある。無数のランタンが輝く「セイロン」のパビリオンは、いわば仏教国セイロンが世界の平和を祈念するブッダの心を発信しているのだ。既に建物は解体され、何処にもその証左を得ることは出来ない。然し、今思い返してみる

と、バワ・アートを感じさせてくれる何かがあった。万博の総設計者は丹下健三をはじめ第一人者ばかりであるが、それらの方々と肩を並べることが出来たスリランカの建築家は、自国を理解し熟知するバワしか考えられない。

バワの透き間アート

2012年10月初旬、インド洋に面した幹線道路沿いに建つ、ジェットウィングライトハウスに立ち寄った。ゴールの北西に位置し灯台の役割を担って命名されたと聞いている。ご一緒下さったスリランカ平和寺の檀家代表アヌラ・デ・シルワ氏は、「1997年に建てられたバワのホテルですよ。バワの建築のエッセンスが詰め込まれているんです」と話された。小さな岬の地形を生かし、周辺の自然を愛する者の立場で、バワの個性が豊かに溢れてた設計とアイデアからデザインされている。潮騒の音、目前に広がる海波が砕ける力強さ、朝夕で変化する気候、刻々と変わる海の表情など、それ自体が魅力となって異国からの観光客を呼び込んでいる。然し、地元の人はこの有名なライトハウスを知る人は少ない。宿泊者たちの感動と絶賛の声広がるに従ってバワの名が馳せていったように感じる。

私は、石造りのエントランスから2階に登る螺旋階段にある、旗を掲げ行進するようなオブジェを眺めた。じっと観ていると、1505年ポルトガル兵がセレンディブ(旧スリランカ)に攻め入り、キャンディ王朝を支配するまでの歴史をドラマティックに表現しているようだ。階段の手すりの透き間を利用したアートである。

南西海岸に建てられたバワのトロピカルリゾートホテルは数多い。それらそれぞれに空間を利用したアートがあり、個性的な椅子やや東洋の円窓には珍妙な動物インテリアが置かれている。いわば透き間を利用したアートの中にはバワ独自の世界観が、潜んでいるようだ。

シーマ・マラカヤ寺院

2013年1月、コロンボ市内を車で巡り高層ビルの並ぶ所で「あのベイラ湖に浮かぶのは、シーマ・マラカヤ寺院だよ。ガンガラーマヤ寺院に付属する受戒堂で、戒律を守り身を清浄に保つよう



西部州コロンボにあるシーマ・マラカヤ寺院。

(ウィキペディアより)

…具足戒を受けた僧侶たちが1か月に1度懺悔する場所として集まるんだよ」続いて「毎年2月の満月の日はペラヘラ祭が行われ、装飾品を付けた象、キャディアン、ダンサー、ドラマー、アクロバット、悪魔祓いの仮装行列を観に来る人で賑やかだよ。カティナ会もウエサク祭にも大勢の人が参拝する…」と同行者の話である。

見れば高層ビルの並ぶ場所にあるオアシスのようである。先にみた湖上に建つ国会議事堂を縮小したような、水とのコラボレーションはバワの真骨頂である。1976年から1978年の作品で、伝統的な寺院形式を踏襲せず革新的な建造物である。スリランカというよりも東南アジアでみたような雰囲気がある。湖に浮かぶような境内には、短い栈橋を渡って歩く。境内に入ると仏塔、菩提樹、仏像が安置され、寺院としての機能を果たしている。ホテルには滅多に訪れる機会のない現地の人々も、此の寺院にはお参りするという。寺院の壁面は風通を考えた格子状で、神聖なきもちにかられるような作りであった。

■注

- 1) ジェフリー・バワ(Geoffrey Bawa、は、スリランカの科ロンボ出身の建築家。スリランカを代表する建築家で、トロピカル建築の第一人者として多くのホテル建設を手掛けた。(ウィキペディアより)
- 2) ジェフリー・バワの設計です (編集部調べ)

日本人の味覚にぴったり、上海家庭料理

講師:宣 芳さん 麻生市民館・料理室 2016年11月15日(火)

これまで 'わんりい' の名で80回近い料理関係の活動をしてきた。小籠包やワンタンなども上海料理の範疇に入るらしいが、ハッキリ上海料理と銘打って中国料理を取り上げたのはなんと今回が初めてだった。更に、これまでの中国料理で魚をメインに据えたのは、会が始まった当座、京劇俳優の殷秋瑞さんが指導してくれた、ボラの甘酢あんかけ位なものだ。余談だがこのボラは50～60cmもあって中華鍋に入らないサイズで、お玉で200度ほどに熱した油をざあざあ流し掛けて揚げるという豪快な調理法で目を剥いた。

さて、我が家にある、^{おうま きじゅん}王馬熙純さんの、NHK今日の料理・中華料理の本(1976年初版)による上海料理の紹介では、「中国東部の沿岸地方には、上海料理、蘇州料理、揚州料理などがあり、それらをまとめて上海料理と呼び慣らされて来、中国最大の川、長江の河口に近いという地の利から、豊富な海産物と米を主体にした食生活を送ってきた」そうで、「調味料も昔から日本の醤油に近い^{ジャンヨウ}醤油(中国の醤油)を使っており、日本人の味覚に合うようです」とある。

今回の「上海料理」講師は、10月開催の「チマキの会」と同じく上海出身の宣さんで、指導頂いた料理は、

- 1、^{ザーシャンリン}炸香玲(豆腐皮包肉)
- 2、清蒸魚&老豆腐(イシモチと豆腐蒸し物)
- 3、^{ザーシャンリン}粉絲鮮湯(春雨と小松菜)



^{ザーシャンリン}炸香玲(豆腐皮包肉)の皮は紗のように薄い



肉を捏ねる宣さんの手元を見つめる参加者たち

菜のスープ)の3種類である。

皆さん、^{ザーシャンリン}炸香玲(豆腐皮包肉)と聞いてどのような料理のイメージを持たれますか? ご存じの方はかなりの中国料理通ではないかと思いますが、なんと紗のように薄く延ばされた乾燥湯葉を水に浸けて戻し、醤油、酒、生姜、パン粉、片栗粉で調味されて、しっかり捏ねられた豚ひき肉を棒状に包みパリパリに揚げ焼きした、「ビールのおつまみにぴったりです」と講師の宣さんが言うように、軽くてもたれないスナック風の一品である。揚げたてが命のようだが後を引く美味しさだった。

清蒸魚&老豆腐(イシモチと豆腐蒸し物)は、セットで一品とのことで、この皿のメインはやはり清蒸魚になるかと思う。前日注文し、朝一番でト口箱のまゝスーパーで購入してきてくださったというイシモチは眼が澄み刺身にもなるというぴんぴんの生きの良さ。魚の肛門にハサミを入れてチョキチョキと腹を割いて内臓を取り除き、更に血合いや腹膜もきれいに除いて神経質なくらいに綺麗に水で洗ってから魚の表裏、腹内に塩をすり込んだ。暫く経って染みだした汁は捨て、生姜と紹興酒を掛け、お腹には生臭みを消すのと蒸した後の魚の姿が崩れないようとの一石二鳥の目的で、^{ザーシャンリン}炸香玲用に用意した肉を丸めて入れた。魚の生臭みを残さない徹底的な配慮は「目から鱗」だった。

また、3つ目のメニュー、^{ザーシャンリン}粉絲鮮湯(春雨と小松菜)



テーブル狭しとばかり並んだ、豪華ランチを目前にニッコリの参加者たち。

のスープ)では、上記同様に手入れしたイシモチ3匹を大なべに入れて結構な時間煮込んで出汁にした濃厚なスープも、出汁が効いて絶品だった。

参加者は、いつもよりやや少なめの12名だったが、3テーブルに分かれて、お頭付きの魚をメイン

ディッシュに、^{ザーシャンリン}炸香玲、スープ、サラダ、女性の美肌作りに効果があるという「白きくらげ・棗・蓮の実」のデザートや差し入れの大きな富有柿も加わってなかなか豪華な昼食を楽しんだ。

(報告：田井光枝)

🍴 上海家庭料理の代表的な「清蒸魚」のレシピ 🍴

●清蒸魚(蒸し魚)と老豆腐

※両方合わせてワンセットのお皿になります。

【材料(2人分)】

白身の魚(鯛、いしもち等白身の魚) 200g~300g
 香菜適量、ネギ=1/2本、生姜=1片
 紹興酒=大さじ4、薄口醤油大さじ=3~5
 塩=大さじ2~4、サラダ油(又は胡麻油)=50g
 木綿豆腐=1丁約200g、桜エビ=適量

【作り方】

- ①魚は鱗を落としてお腹を綺麗に洗う。魚300g以上ならお腹の上に斜めに2本飾り包丁を入れる。
- ②魚全体に塩を振りかけて良く擦り込み10分以上置いて表面に浮いた水分を拭き取る。
- ③魚を皿に乗せ、魚の腹の中と腹の上に刻みネギと薄切り生姜を入れ、紹興酒を大さじ1程度を振りかけ置く。(紹興酒は魚の生臭みを消しうまみを引き出すために欠かせない。ひき肉に味をつけ団子状に丸めて腹に入れて蒸すと、蒸した後の魚の姿がいい)。
- ④火をつけ、湯気が出上がり始めたら魚を蒸す。(約10分程度)
- ⑤蒸し器から出して、魚の皿の汁は捨てる。

- ⑥魚を蒸している間に、木綿豆腐を電子レンジに入れ、800W 80秒で温める。(豆腐の水分が出るので、その水分は捨てる)(老豆腐)
- ⑦豆腐を16個に切り分ける。
- ⑧桜エビを少々炒める(桜えびの香を引き出す)。
- ⑨大きめの皿の周囲に、木綿豆腐を並べ、蒸し上がった魚を真ん中に置いて、醤油大さじ2を振りかけ、ごく細く切った白ネギと青ネギを綺麗に乗せる。
- ④フライパンに胡麻油を入れて香りが出始めたら、熱々の内に、魚と千切りネギにかける(ネギの香りが漂う雰囲気演出する)
- ⑤最後に桜エビと香菜を料理の上に散らす。(完成)



満柏画

第88話：当然の責務

6歳ぐらいの小学生の女の子が、お巡りさんのところへやって来た。お巡りさんを上から下までしっかり観察して、用心深く訊いた。

女の子「あなたはお巡りさんでしょ？」

巡査「そうだよ」

女の子「ママは、助けて貰いたいことがあったら、どんなことでもお巡りさんをお願いしなさいって言うんだけどほんとなの？」

巡査「本当だよ。なんでも言ってごらん」

女の子「ほんとに？」

女の子は片方の足を巡査の方に伸ばしていった。「じゃあ、靴の紐を結んでもらえる？」

第89話：月と太陽の評価

ある人が小強に訊いた。「月と太陽とどっちが大切かなあ？」

小強「そりゃあ、月が大事に決まっているよ」

ある人「どうしてそう思うんだい？」

小強「だって、太陽は昼間出てくるだろ。昼間は太陽がなくなっちゃってよく見えるけれど、夜は、月が出なきゃ、何にも見えないじゃないか！」

第90話：手紙

李明が友達に手紙を書いていると、男のヒトが来て後からのぞき見し始めた。李明は気が付いて、手紙の最後に書き加えた。「本当は、もっと色々書きたいことがあったけど、後ろで覗いている人がいるからここで終わりにするね」

覗いていた男は、それを読んで腹を立てた。

「君は私を馬鹿にするのか！」

李明「人の手紙を覗くような人は、何も言う資格はないよ！」

男「私がいつ君の手紙を覗いたと言うんだ！」

李明「覗いたことがないっていうの？ じゃあ、どうして僕があんたのことを書いたのが分かったんだい」

第91話：両方の意見を聴く

先生が教室で説明をした。

「物事の判断を下すときは、必ず物事の両面の意見を聞いて判断しなければいけないよ。どういう場合かな？」

一人の学生がさっと答えた。

「CDを買うときです」

第92話：反証

学生「先生がさっきおっしゃった『偽物はみんな美しくない』という話は、完全に正しいとは言えないと思います」

美術の先生「その論拠となる例を示すことが出来るの？」

学生「先生の入歯を例にとります。先生は偽の歯(入歯)を入れなければ、こんなに美人ではないと思います」

第93話：稲妻と雷鳴

先生「みんな気が付いているかな？ 稲妻は雷鳴が聞えるより前に見えるんだよ」

生徒「先生、それは当然ですよ。人間の眼は耳よりも前についているからでしょ！」

‘わんりい’は、いつでも新入会を歓迎しています。

年会費(4月～3月)：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 ‘わんりい’
入会時期によって割引あり。お問合せ：下記。

☎042-734-5100 又は E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由にとって頂けます。上記へお問い合わせください。

町田周辺の国際協力・支援・友好活動に関わっている団体が、毎年秋、実行委員会を立ち上げて開催の、町田発国際ボランティア祭・夢広場に参加。今年はその19回目になる。

色とりどりのカラフルな民芸品が並ぶ各団体のブースの先に、仮設舞台がしつらえられ、民族色豊かな出し物が上演された。流石、「晴」の特異日・11月3日で、前日の冷たい雨が嘘のように晴れ渡り、暖かな日差しが会場一杯に降り注いで正午の頃は暑い位になった。快晴の天气に誘われて街歩きに出た人も多かったようで、さほど広くないぽっぽ町田イベント会場は人で溢れた。

'わんりい'のブースは、ラオス・山の民モン族への支援で、現地の女性たちが心を込めて丁寧に刺繍されたポーチや小物入れブックカバーなどと共に、11月号で紹介した、築田寺「愛語の会」の活動で手づくりされた抱き人形を販売した。抱き人形は、着せ替えもできる手づくりの温かみが好評で、最初お持ちいただいた5、6体の抱き人形は、男の子、女の子と2体購入される方もいらっやって瞬く間に売れてしまい急遽、新しいお人形さんを届けて頂くほどだった。それぞれ優しい顔立ちで、名前を付けて可愛がりたいような雰囲気、きつと長く可愛がってもらえると思う。

今年の夢広場の売りは舞台で、これまでと異なる、フィリピンのバンブーダンスやネパールのポップ風のダンスなどのプログラムが彩り豊かに色々上演され、ぽっぽ町田の前を通る人たちを惹きつけた。中でも極め付きは、元々はプロレスラーだったといういかつい



女装パフォーマーのレディビ Beardさんが、サービス精神あふれる笑顔で各出展団体を訪問('わんりい'のブースで)

男性の女装パフォーマー・レディ・ビ Beardさんで、「歌え! 踊れ! 破壊せよ!」とのキャッチコピーで、狭い舞台から飛び出さんばかりに歌いながら踊った。

最初、写真だけで彼女の女装写真を見たときは、「エエ〜!!」と絶句したが、意外や意外、実物の彼は愛嬌たっぷり、豊かな表情の持ち主、サービス精神旺盛な嫌みのない人柄で、パフォーマンスの前に物品販売のブースを回りあちこちで愛嬌をふりまき人気を集めていた。現在テレビ出演の他あちこちで引っ張りだこの人気なのだそう。最後は、「'わんりい'日本の歌を美しく歌おう!」の講師・Emmeさんのボイストレで、昨年同様、空を仰いで思い切り声を出し、赤とんぼを歌った。

今年の夢広場では例年になく若手のボランティアたちの活動が目立ち、町田の国際活動が定着してきていることを感じた。

(報告 田井光枝)



裸足で元気いっぱい踊る
フィリピンのバンブーダンス



色とりどりの、丁寧に手刺繍されたモン族の刺繍小物や町田築田寺「愛語の会」の温かな雰囲気の抱き人形が女性達に人気。('わんりい'のブースで)



中国日本国交正常化45周年記念

「福建・烏龍茶の故郷及び福清黄檗印象」馮学敏写真展 <https://spe.jst.go.jp/cdb/event/detail/505>

主催：馮学敏写真展実行委員、中国文化センター 後援：中国駐日本大使館、中国福建省国際友好連絡会他多数
会場：中国文化センター 〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1階

「茶の故郷は中国にあり、烏龍茶の故郷は福建にあり」といわれる。福建は中国の南東に位置し、北西の山に囲まれながら、南に3750 kmに及び入り組んだ海岸線を持っていることにより、山の幸とも言える良質の「茶」が古くから栽培されて来た。特に烏龍茶の「鉄観音」は茶の貴族と称されて、国内外にその名を馳せている。

展示作品は、写真家・馮学敏がここ10年の間に5回、福建に足を運び、福建の世界遺産(武夷山、福建土楼)をはじめ、風俗習慣や茶文化などを撮影してきた作品であり、今年3回の撮影(延べヶ月間)では、現地政府の多大な協力により、現地の茶文化と共に日本の仏教黄檗宗の開祖隠元禅師について撮影したものである。

■2016年12月6日(火)～12月16日(金) 10:30～17:30(最終日13時まで)

●会期中の【特別企画講座】

- 1) 2016年12月 6日(火) 15:00～17:00 林文清:「建盞(天目碗)と烏龍茶・煎茶」
- 2) 2016年12月13日(火) 15:00～17:00 馮学敏:「福建印象」

■講演会の申し込み：下記必要事項を記載し、FAX:03-6402-8169又はE-Mail:info@ccctok.comで申し込む。

- ①参加氏名(フリガナ)、②電話番号又はメールアドレス、③希望の講師名 ※メール件名を「馮学敏写真展講座申込(希望の講師名記入)」として送信。定員オーバー等により参加不可の時のみ連絡あり

和光大学 レクチャーコンサート2016

「ジャズの楽しみ方講座」

講師・演奏：MJQ(machida jazzoo quintet)
安田昇司/サクソ、中野利彰/ベース、秋山映一/ギター、天野淑子/ピアノ、吉田慎悟/ドラム
司会：伊藤隆治(和光大学経済経営学部教授)

2017年1月23日(月)

18:30～20:30(17:45開場)

和光大学ポプリホール鶴川(地下2階ホール)
交通：小田急線鶴川駅北口徒歩3分

- 受講料1000円(定員250名)
- ◆お申込み方法：ハガキ、FAXまたはE-mailいずれかで、「和光大学レクチャーコンサート2016」と明記し、①氏名(フリガナ)、②〒・住所、③電話番号を必ず記入し、1月16日(月)までに下記へ。電話での申し込みは不可。

*

「和光大学企画広報係 大学開放フォーラム」

195-8585 町田市金井町2160
TEL: 044-988-1433 FAX: 044-988-1594
E-mail: open@wako.ac.jp

【2016年12月定例会・新年号'わんりい'発送日】

- ◆問合せ：☎042-319-6491(わんりい)
- 12月の定例会：12月6日(火) 13:30～
- 2017年度新年号のおたより発行日：12月28日(水) 10:30～

定例会及び新年号のおたより発送準備は共に、三輪センター・第三会議室です(弁当持参)

劉薇 来日30周年 クリスマスコンサート
～情熱のスペイン音楽に魅せられて～

<http://liuwei-musics.com/music/index.html>

- ▲2016年12月16日(金) 19:00開演
- ▲銀座王子ホール <http://www.ojihall.jp/facility/access.html>
- ▲前売：4500円(当日：5000円)
- ▲全席自由席

【演奏予定曲】 ヴァイオリンソナタ(グラナドス)/ツイゴイネルワイゼン(サラサーテ)/スペイン舞曲1番「はかなき人生より」(ファリャ=クライスラー編)他

- ◆主催：エム・バイ・ミュージクス
- ◆チケット問合せ：☎03-3789-6518(エム・バイ・ミュージック)



第9回 東京旋律音楽会

出演者

鄭宇(揚琴)/曹雪晶(二胡)/銭騰浩(笙)
城宏憲/(テノール スペシャルゲスト)
国広よう子(司会・朗読) 千葉県立船橋高校合唱部

- ▲2016年12月23日(金) 19:00開演(18:30開場)
- ▲東京文化会館小ホール(上野駅公園口前)
- ▲4800円(当日：5000円)全席自由席

- ◆主催：華宇創意株式会社
- チケット問合せ：☎090-3006-2185

●わんりい料理の会12月

ウ ユ エ フ ォ ン
中国遼寧省出身の吳躍鳳さんの指導で

中国のお母さんの愛を味わう、簡単でとても美味しい中国のおやき

2016年12月12日(月) 10:30～14:00 麻生市民館・料理室

今年4月、'わんりい'会員の山田賀世さんが日本の太海苔巻の巻き方を留学生と私たちに指導頂きました。その時にご参加のイエリンさんのお母様が、お食後として焼いて下さったのが「糖酥餅」と「金絲餅」という中国のおやきでした。料理が飛び出す「不思議なテーブルかけ」を見ているように、鮮やかな手つきで焼いて下さいました。今回は、中国の代表的スナックともいえる、ニラ、玉子、海老(時にはお肉とキノコも)を包んで焼く「餡餅」を加えて、三種類の「餅」をご指導頂き、焼き立てをお昼*として頂きます。



*)中華風スープ、サラダ、デザート付です。

- 参加会費：1,500円(講師謝礼 材料費 会場費) ※留学生は無料
- 募集人数：15名 ●持ち物：エプロン、筆記用具
- ◆申込みと問合せ：☎042-734-5100 Email: wanli@jcom.home.ne.jp 'わんりい'

●わんりい料理の会料理の会2017年1月

長野県のソールフード・おやきでほっさりしよう!

2017年1月12日(木) 10:30～14:00 町田市民フォーラム・調理室

長野県の郷土食といえば、真っ先に思い浮かべるのが「おやき」。小麦粉で作る皮は薄皮、もちり、ふっくらと地方によって様々、そして具の種類も豊富。薄皮で具の種類も豊富。現在長野県青木村に生活の拠点を移された 'わんりい' 会員の岩田温子さんに現地のおやきの作り方を指導頂きます。作り方が分かれば、おやきの中身はは創意工夫でオリジナルのおやきが出来ますね。伝統的おやきの他現代的なおやきも加えて4種類、中国の包子とはまた違ったおやきの美味しさを味わってみましょう。

中国の皆様も、この機会に日本の郷土色をマスターできたらよいのでは？是非、一緒に!【メニュー】おやき4種類 和風サラダ スープ デザート



- 参加会費：1,500円(講師謝礼 材料費 会場費) ※留学生は無料
- 募集人数：15名 ●持ち物：エプロン 筆記用具
- ◆申込みと問合せ：☎042-734-5100 Email: wanli@jcom.home.ne.jp 田井

第10回 市民協働フェスティバル「まちカフェ!」(2016年度)

<https://www.city.machida.tokyo.jp/community/shimin/event/machicafe2012.html>

市民協働フェスティバル「まちカフェ!」は、町田市内で活動するNPO法人や市民活動団体、地域活動団体(町内会・自治会)などが一堂に集い、活動発表などを通じて交流を深めるためのイベントです。



- 開催日：2016年12月4日(日曜日)
- 時間：午前10時から午後4時まで
- 場所：町田市役所全館
- 主題：「出会い」「知り合い」「深め合う」まちだ
- 主催：第10回市民協働フェスティバル「まちカフェ」実行委員会
- 問合せ：市民部 市民協働推進課 ☎042-724-4362



*昨年度は初めての参加で様子が見えなかったが、物品販売と会の紹介で参加しました。今年は、「第10回まちカフェ」に足を運んで下さった皆様と一緒に、中国水墨画年賀状(指導：満柏画伯/日本水墨画協会会長)と中国風剪紙(指導：何媛媛さん)のワークショップで楽しもうと予定しています。参加費：水墨画300円(ハガキ付) 剪紙体験100円(折り紙付)です。ご参加、是非!と思っています。(※水墨画の手本は22P「鶴川水墨画教室」と同じです。手ぶらで参加できますが、ご自分の使い慣れた筆がありましたらご持参ください)。

◆わんりいの催し **中国語で読む・漢詩の会**

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

▲12月の講座：まちだ中央公民館6F 第3・第4学習室
12月18日(日) 10:00～11:30

▲1月の講座：まちだ中央公民館6F 第3・第4学習室
1月15日(日) 10:00～11:30

▲講師：植田渥雄先生
(現桜美林大学孔子学院講師)

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)



◆わんりいの催し **ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!**

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

▲12月 6日(火) まちだ中央公民館・音楽室

▲1月24日(火) 視聴覚室

▲時間 10:00～11:30

★動きやすい服装でご参加ください

●練習曲：「ひとつの種」

●講師：Emme(歌手)

●会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

●定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



恒例！'わんりい'新年会日取り決定！！

2017 'わんりい'新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう

場所：麻生市民館・料理室

(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2016年2月7日(日) 11:00～14:00

- 定員：先着40名 ('わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円 (会場費 シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 申込：メール：wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX：042-734-5100



初心者のための【鶴川水墨画教室】

体験のお誘い

来年の干支「鶏」を描いてみよう!

講師：満柏(●日中水墨協会会長)

●場所：鶴川市民センター(町田市大蔵町1981 駐車場有)
小田急線鶴川駅からバス
「鶴川市民センター入口」下車

●曜日・時間：14:00～16:00
毎月第2、第4(月)

●体験参加費：1000円
(見学無料/
手ぶらで参加OK)

●問合せ：
☎042-735-6135
野島



使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

'わんりい' 219号の主な目次

北京雑感(109)携帯電話	2
論語断片(22)酒无量,不及乱	3
「漢詩の会」講座報告⑥「江村」	4
混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義Ⅸ	6
東西文明の比較(10)	8
大連・長春・丹東の旅(その3)	10
フィリピン滞在記⑩2年間の活動を終えて日本	12
に帰国スリランカ紀行⑬私の中のパワ・アート	14
わんりい活動報告・上海家庭料理の会	16
中国の笑い話	18
わんりいの活動報告・夢広場	19
わんりい掲示板	20・21・22